総合相談室だより　8月号（第15号）

「1つの行動についての多様な意味」

梅雨も明け、暑い毎日が続きます。暑苦しい夏には背筋が凍るような怪談話、というのが日本の風物詩にもなっています。せっかくの夏休みやお盆ではありますが、旅行や遠出はまだまだ自粛ムードという人が多いのではないでしょうか。そんな中で、お家で怪談話を楽しんでみるのもいいかもしれません。

怪談話と聞くと主に日本の古い幽霊のお話をイメージしますが、今回は海外のちょっと不思議で怖い童話を紹介したいと思います。皆さんは、このお話をどのように捉えるでしょうか？

～ハーメルンの笛吹き男～

昔、ドイツのハーメルンという街は、ネズミが大量発生して、住民は困り果てていました。そんなある日、街に不思議な男が現れたのです。色とりどりの布をつなぎ合わせた衣装で着飾った笛吹きの男で、「報酬をくれるのなら、街のネズミを退治してあげましょう」と言います。街の人々は報酬を払う約束をして、ネズミの退治をお願いしました。

男は笛を取り出し吹きならしました。すると不思議なことに街中の家々からネズミが走り出て来て、男の周りに群がりました。男が歩きだすとネズミも男の後ろをついて行き、ヴェーゼル河まで行くと、男はそのまま水の中に入っていきます。するとネズミたちも男の後について行き、1匹残らず溺れてしまったのです。しかし、街の人々はネズミが勝手に河に入っただけなどと言い訳をして、約束を守らずに男に報酬を払いませんでした。

すると男は、再びハーメルンに現れます。男は恐ろしい顔をして、笛を吹きながら街を歩きだしました。すると今度は街中の家から子どもたちが次々と出て来て、男のところに走り寄って来ました。子どもたちは男の後をついて行き、男と一緒に街の外に出ていくと、コッペン丘の近くにある処刑場のあたりで男もろともみな消えてしまいました。その数は何と130人。いなくなった子どもたちは、二度とハーメルンに戻ることはありませんでした。

130人もの子どもたちがあっという間に街から消えてしまったというのは、とても怖い話です。この子どもたちはどこに消えてしまったのでしょうか？この童話にはいくつかの解釈があります。

1 つ目は、当時流行していた伝染病で子どもたちが亡くなってしまったことがモチーフにされたという説です。ネズミが大量発生していたということも、関係しているかもしれません。

2 つ目は、軍隊に召集されたという説です。子どもたちで結成された軍隊もあったと言われており、戦地で皆亡くなってしまったり、騙されて奴隷として売り飛ばされたりしたのではないかと考えられています。

3 つ目は、新しい街を開拓する開拓者として街から旅立って行ったという説です。実際、ヨーロッパのいくつかの街は開拓者となった子どもたちの努力の結果として創られたと考えられています。

この童話の教訓は、もちろん嘘をつかず、約束を守ろうということもあります。しかし、もう 1 つ教えてくれるのは、同じ行動であっても、その行動に対する解釈が異なれば、意味も変わってくるということです。

現在、私たちの行動の多くは、コロナという感染症と向き合うものとして説明できることが多いように思います。例えば、人が多く集まる場よりも人の少ない場を選ぶ人が増えたのではないでしょうか。このこと自体は、コロナとしっかり対峙して生活していることを意味しているので大切なことですが、皆さんの中には「自分の学生生活はコロナのことばかりだ」「もっとみんなでワイワイ盛り上がりたかった」とがっかりしている人もいるかもしれません。しかし人の少ない場は、静かで作業に集中できるし、自然豊かなところも多いし、ボーっとしたり自分を見つめ直したり、決して悪いことばかりではありません。

将来の自分たちが生きていく新しい街を創っていくためにハーメルンの子どもたちは街から出て行ったという解釈のように、今皆さんがとっている行動が将来の自分を創っていくためのものであると意味づけるとしたら、どのように解釈できるでしょうか.

1 つの行動についての多様な可能性を探ってみませんか？

総合相談部門も一緒に皆さんと考えていきたいと思っています。

専任カウンセラー　後藤龍太

令和 3 年 8 月 2 日発行